福崎町埋蔵文化財調査報告２２

兵庫県神崎郡福崎町福田所在

中溝遺跡

—福崎駅前整備事業に伴う発掘調査報告書—

２０２１年１１月

福崎町教育委員会

福崎町埋蔵文化財調査報告書２２

中溝遺跡

―福崎駅前整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2021年 11月

福崎町教育委員会

あいさつ

近年、福崎町内各地で開発事業が増加しており、それに伴い埋蔵文化財発掘調査も進んでおります。その結果、町内の歴史が次第に明らかとなり、教育委員会では随時それらの成果を報告して参りました。このたびは福崎駅周辺整備事業に伴う中溝遺跡の調査成果を報告いたします。中溝遺跡は平成28年度に遺跡として報告されておりますが、開発により影響を受ける箇所について調査を行ったところ、弥生時代から中世にかけての遺跡の存在が明らかとなりました。本書は、その成果を刊行するものです。

最後に、発掘調査にあたってご協力をいただいた関係各位の皆様にご理解とご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。

令和３年10月

福崎町教育委員会
教育長　髙橋　涉

例言

1．本書は福崎駅前整備事業に伴って調査を実施した兵庫県神崎郡福崎町福田字中溝に所在する中溝遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は平成 28～令和元年度に試掘確認調査を行い、平成 28・30年度・令和元年度に本発掘調査を行った。調査は福崎町教育委員会が実施した。

3．経費は試掘確認調査を国庫補助金により、本発掘調査は福崎町単費により実施した。

4．調査体制は下記のとおりである。

調査主体	福崎町教育委員会		
教育長	髙寄十郎（平成 28～令和元年度）	社会教育課主査	玉田誠司（平成 28年度）
	髙橋　涉（令和 2～3 年度）	社会教育課主査	長谷川幸子（平成 30～令和 3 年度）
社会教育課長	大塚久典（平成 28～令和元年度）	社会教育課主査	樋口　碧
	松田清彦（令和 2～3 年度）	埋蔵文化財専門員	渡辺　昇
社会教育課副課長	福永知美（平成 28～29年度）	整理作業員	梶　智美
	森　公宏（平成 30～令和 3 年度）	整理作業員	福永明子
社会教育課課長補佐	中塚喜博（平成 30～令和元年度）	整理作業員	原井川奈美（平成 30～令和 3 年度）
社会教育課係長	藤原　元（令和 2～3 年度）	整理作業員	常陰ひとみ（令和 2～3 年度）

5．本書に使用した方位は基本的に磁北で、標高は福崎町設定の基準点を使用している。

6．本書に掲載した図のうち遺跡位置図は福崎町発行の都市計画図（1/10,000）を、調査区配置図は福崎町都市計画図（1/2,500）を編集したものである。

7．執筆編集は梶・福永・原井川・常陰の協力を得て渡辺が行った。

8．本報告に係る図面、写真、遺物等は、福崎町教育委員会にて保管している。

9．調査・整理作業において多くの方々や機関にご指導・ご協力をいただきました。感謝します。

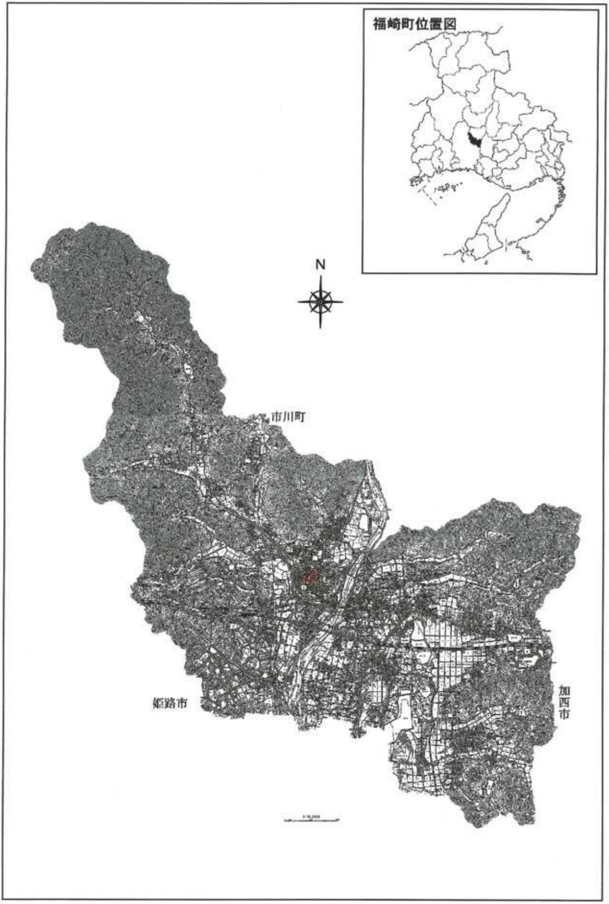
本文目次

あいさつ・例言

第１章　はじめに
　第１節　位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第２節　調査に至る経緯と試掘確認調査の経過と結果・・・・・・・・・・・・2
第２章　第１次調査結果
　第１節　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　第２節　遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１
第３章　第３次調査結果
　第１節　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
　第２節　遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５
第４章　第５次調査結果
　第１節　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６
　第２節　遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２１
第５章　おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３１

図目次

第　１図　福崎町の位置と調査地位置図
第　２図　中溝遺跡周辺遺跡地図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第　３図　試掘確認調査と本調査位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第　４図　１３Ｇ・１６Ｇ・１８Ｇ土層図・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第　５図　第２次調査　遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第　６図　出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第　７図　調査位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第　８図　土層図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第　９図　第１次調査　土層図・平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第１０図　ＳＢ０１・ＳＤ０１実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
第１１図　出土土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１
第１２図　第３次調査　遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３
第１３図　第３次調査　土層図・平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
第１４図　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５
第１５図　第５次調査　土層図・平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・１７
第１６図　ＳＨ０１実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８
第１７図　ＳＢ０２～０４、ＳＡ０１実測図・・・・・・・・・・・・・・・１９
第１８図　ＳＡ０２～０５実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０
第１９図　ＳＥ０１実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２１
第２０図　ＳＤ０６実測図（出土状態図）・・・・・・・・・・・・・・・・２１
第２１図　ＳＸ０２～０４実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２２
第２２図　遺物実測図（1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２５
第２３図　遺物実測図（2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６
第２４図　遺物実測図（3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７
第２５図　遺物実測図（4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３０



第１図　福崎町の位置と調査地位置図

第1章　はじめに

第1節 位置と環境

中溝遺跡は兵庫県神崎郡福崎町福田字中溝に所在する遺跡である。本報告にかかる福崎駅前整備事業に先立った試掘調査で平成28年度に新たに確認された遺跡である。

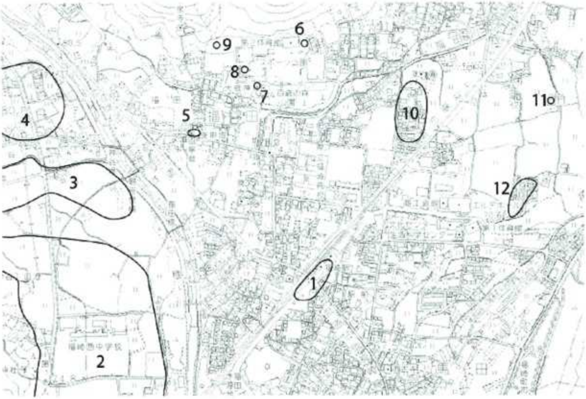
福崎町は兵庫県中央に近いところに位置している。南北方向には播磨5河川の1つ市川が流れ、その中流域に所在する。兵庫県中央部には中国山地が存在し、その山塊から流れる水を集めて南流している。但馬南端の生野町に源を発し、上流から小田原川・越知川・岡部川・七種川などの支流が流れ込んでいる。福崎町に入る福崎町山崎から市川流域の平地は広がり、福崎盆地とも称されている。南側は神崎郡と飾磨郡の郡界である姫路市砥堀で平地は狭まっている。東西方向には中国自動車道が通っているが、ここは山崎(安富)断層が通っており直線的な低地が形成されている。そのことから、播磨中央部の東西方向の交通路として古くから利用されていたようである。中溝遺跡は地形区分上では低位段丘面に位置している。南東縁辺部(特に北東側)は崖状になっており、笠形山から岡部川沿いに延びる断層によるものである。

中溝遺跡は市川西岸に位置し、周知の遺跡は線路を隔てた福崎駅北側に清水遺跡が、東北東に東田黒遺跡が、東側に馬田スガキ遺跡が存在する。いずれの遺跡も遺物は採集されているが、遺跡の実態はつかめていない。東田黒遺跡で弥生～古墳時代の遺物が出土している程度であったが、中溝遺跡の確認によって福崎駅周辺での遺跡の消長が多少明らかになってきた。福崎町では遺構は縄文時代から遺物は旧石器から確認されているが、市川西側では旧石器の遺物は確認されておらず、弥生時代の遺構も確認されていなかった。今回の調査で中溝遺跡から弥生時代後期の竪穴住居や中期の土坑が検出され、市川東岸と同様に生活していることが明らかになった。

市川西岸では林谷遺跡で縄文時代の落とし穴がまとまって調査されており、林谷遺跡で石匙が、矢口遺跡で不定形刃器が出土している。縄文土器も磨滅したものが数点出土しているが、時期を特定できるものは市川東岸の遺跡で、加治谷藪下五反畑遺跡や西大貫遺跡・南田原長目遺跡などから前期から晩期の土器が出土している。弥生時代の遺跡も同様で西岸の遺跡は少なく、今回の調査成果は重要である。

古墳時代に繋がる弥生時代末期の遺跡は町内各地で検出されているが、前期から中期に続く遺跡は認められない。古墳時代後期になって、林谷遺跡や加治谷藪下五反畑遺跡などで竪穴住居が調査されている。古墳も以前に鉄剣が出土した高橋古墳群が中期に遡ると考えられている程度で、確実な古墳は相山古墳まで待たないと存在しない。高橋古墳群や大善寺古墳は主体部が箱式石棺である。町内には前方後円墳や竪穴式石室は確認されていない。相山古墳は径20mの円墳で埴輪列や形象埴輪を保有している。山頂に位置することから、規模以上に大きく見える古墳である。それ以降、横穴式石室を主体部とする古墳が構築されていく。大型石室は大塚古墳・妙徳山古墳・朝谷1号墳・神谷古墳・池ノ下古墳である。石棺も町内各所に遺存しているが、石棺仏も多く確認されすべて高室石である。古墳内にあるのは東広畑古墳だけである。

奈良時代になると遺跡数は増加する。弥生・古墳の遺跡分布に比べて町内各地で認められるように広がっている。須恵器窯跡も八千種の福井谷遺跡、東田原の加治谷垣ノ内遺跡、西田原の北野嶽ノ下遺跡で確認されている。福井谷遺跡からは鴟尾も出土している。南田原条里遺跡・桜東畑遺跡では方形掘り方の大型建物も調査されている。稜椀や製塩土器の出土も比較的多く認められる。



第２図　中溝遺跡周辺遺跡地図

1　中溝遺跡	2　宮ノ前遺跡	3　観音堂遺跡	4　下々通遺跡
5　福田無量寺跡	6　東大谷古墳	7　宮山古墳	8　上垣内古墳
9　小山古墳	１０　清水遺跡	１１　大塚古墳	１２　福田東田黒遺跡

第２節　調査に至る経緯と試掘確認調査の経過と結果

兵庫県と福崎町とで福崎駅周辺整備事業が計画された。播但線福崎駅改札口側の南東部分を整備する事業で、線路東側に通る県道甘地福崎線拡幅整備については兵庫県が担当し、それ以外は福崎町が担当して実施することとなっていた。周辺部は宅地化が進み地表観察することが不可能なので、試掘調査を行うこととした。北側県道部分については兵庫県福崎土木事務所が施工することから、兵庫県教育委員会が平成28年６月15日に試掘調査を実施した。調査は上田健太郎（兵庫県立考古博物館）が担当した。1Gから3Gは現県道部分の北側に位置し、新設道路部分になる。

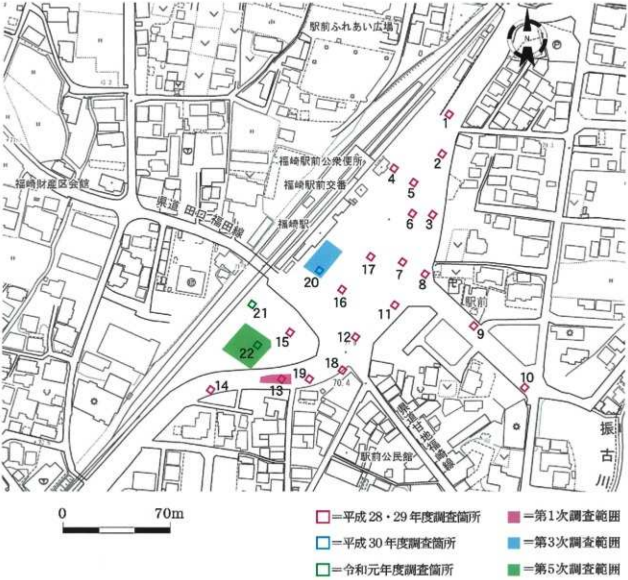
1Gは盛土が厚く盛土の下で地山を検出した。遺構・遺物は確認されていない。2Gは盛土の下に２層の堆積土があり、その下が地山である。第２層上面で溝状遺構を確認したが、現代もしくは近代のものと思われる。第３層はにぶい黄褐細砂で河川堆積物であろう。3Gは盛土の下が第２層暗褐細砂で、第３層は黒褐細砂、第４層が地山である。第２・第３層は河川堆積物と思われる。３層上面で数点の土師器小片が出土している。グリッド内では遺構は確認されなかったが、周辺に遺構が存在する可能性がある。

引き続き福崎町教育委員会によって福崎駅前整備事業部分について試掘調査を行うこととなった。グリッド番号は継続し4Gからとしている。平成28年６月１日に、福崎町まちづくり課から

試掘依頼が提出され、埋蔵文化財の有無を確認するために試掘調査を実施した。買収状況や家屋撤去などの問題があり、一時期に調査することが出来なかったので、用地買収などの進捗に合わせて随時調査を行うこととした。平成28年６月28日に3か所、9月14日(水)に５か所、11月25日(金)に２か所の試掘調査を行った。一部遺構の広がりを確認するためにグリッド(18・19G)を追加した。

調査の方法

調査対象地区の地目は、再開発事業による宅地撤去後の更地ならびに道路であった。開発予定地にトレンチ・グリッドを設定し、買収の進捗状況に合わせて調査を実施した。掘り下げは重機を用い、精査等においては人力により対応した。壁面の図化、写真撮影による記録を適宜行った。調査終了後、埋め戻しも行った。次年度以降も調査方法は同様である。



第３図　試掘確認調査と本調査位置図

平成28年度試掘調査

調査担当者　　樋口　碧（福崎町教育委員会）

　　　　　　　渡辺　昇（播磨町教育委員会）

調査の種別　　試掘調査

調査面積　　　40㎡

調査期間　　　平成28年6月28日、9月14日、11月25日

調査結果はすでに平成27・28年度発掘調査報告（福崎町埋蔵文化財調査報告15、2018）で報告しているので、詳細はそれに譲り遺構が確認された部分のみ記述する。遺構が確認されたのは13Gと16Gで遺跡範囲を確認するため追加設定した18Gでも遺構面が検出された。

13Gは一部細かく分層されたが、大きくは4層から成る。第1層は砕石で、第2層は盛土である山土、第3層は黄灰シルト（耕土・礫・瓦含む）、第4層は灰褐極細砂で、第5層が遺構面であるにぶい黄褐極細砂である。第5層は上部が柔らかく、約20㎝下でしっかりした硬い面を検出した。ただ色調は変化なく層分けは微妙である。下面でピット2基を確認した。中世土師器がピット内から出土しており、中世後半の遺構と思われる。第4層上面に明赤褐細砂が底にレンズ状に堆積している。2～4層は水平堆積しておらず、人為的な層と思われる。

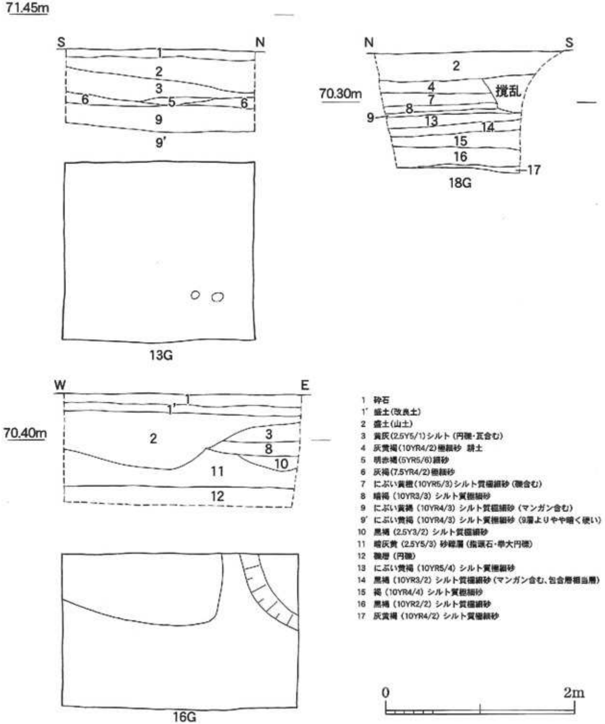
16Gは6層から成る。第1層は砕石で、第2層は盛土である山土（改良材）、第3層は攪乱層（盛土）、第4層は黄灰極細砂、第5層は暗褐極細砂で、第6層が地山と思われる遺構面である黄褐細砂(礫含む)である。調査グリッド北東を中心に現代宅地の痕跡(攪乱坑)が見られる。南東部で黒褐シルト質極細砂を埋土とする土坑が検出されている。最大長65cm、深さ15cmの断面皿状を呈する。第6層は他のグリッドの地山と比べてやや淡かったので念のため掘り下げたところ下層は礫層となっており自然堆積(河川堆積物)と思われる。

18・19Gは13Gで遺構が確認されたことから、範囲確認のために追加したグリッドである。18Gは現県道甘地福崎線南側に設定した。盛土下でコンクリート基礎が残っていたので調査面積を狭めて調査した。第1層は盛土、第2層は耕土、第3層はにぶい黄橙シルト質極細砂、第4層は暗褐シルト質極細砂、第5層は黄褐シルト質極細砂で、第6層は黒褐シルト質極細砂、第7層が地山と思われる褐シルト質極細砂である。第6層が13Gの包含層相当層であろうが遺物は出土していない。地山面が13Gの遺構面に相当すると思われるが、遺構は確認されず遺物も出土していない。

8G調査風景

11G調査風景

今回の３回の試掘調査では、13G・16Gで遺構が検出され、新たに遺跡の存在が明らかとなった。小字名を採り中溝遺跡と命名し、遺跡発見通知を進達し遺跡登録した。遺物は少ないが須恵器・土師器が出土しており、中世後半のものと思われる。今年度本体工事が予定されていたので、中溝遺跡第1次調査として本調査を行った。



第4図　１３Ｇ・１６Ｇ・１８Ｇ土層図

平成29年度試掘調査

調査担当者　樋口　碧・渡辺　昇
調査の種別　試掘調査
調査面積　28㎡
調査期間　平成29年６月19日(月)、12月12日(火)
　　　　　平成30年２月５日(月)

昨年度用地買収や旧建物撤去の都合で調査出来なかった地点を、継続して平成29年度に試掘調査を実施した。調査結果はすでに平成29年度発掘調査報告(福崎町埋蔵文化財調査報告17、2020)で報告しているので、詳細はそれに譲る。調査方法などは平成28年度調査と同じである。

5Gは7層から成る。第１層は砕石で、第２層・第３層は盛土である。第２層は黒褐砂礫で円礫を多く含んでいる。第３層の上面は灰白の廃土(カーバイドなど)が堆積し、下は礫・瓦・タイルを含む層である。下面中央に南北の溝が確認された。屋敷溝と思われる。第4層は黒シルト、第５層は黄灰シルト質極細砂、第６層は黄褐シルト質極細砂である。第６層は西から東に落ち込んでおり、西側が微高地になっている。西側の高い部分の第６層は色調を暗褐に変えており、土壌化し安定したことを示している。暗褐シルト質極細砂の下には灰オリーブの砂礫層があり洪水による高まりが形成されたものと言えよう。5Gでの遺構・遺物は近現代のものしか確認していないが、5G以西の微高地部分には遺跡が広がっている可能性がある。

今年度調査地点においては明瞭な遺跡は確認されなかった。コンクリート基礎がある部分は判断できなかったので、具体的な工事施工時に対応することとした。

平成30年度確認調査（第２次調査）

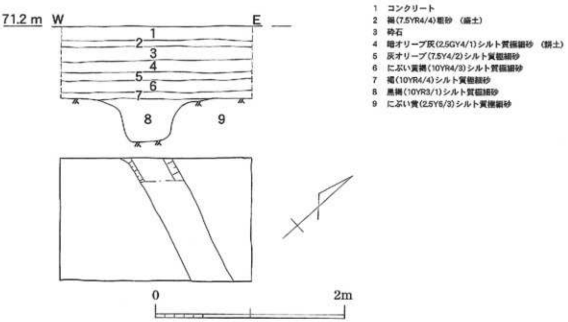
調査担当者　渡辺　昇
調査の種別　確認調査
調査面積　2.3㎡
調査期間　平成30年６月13日(水)

福崎駅に隣接して観光交流センターの計画が具体化したので、その部分について確認調査を実施した。昨年度厚いコンクリート基礎があり試掘調査を行えなかった地点である。

20Gは9層から成る。第1層は厚さ15cmのコンクリートである。第２層は褐粗砂で盛土である。第３層の砕石層とともに鉄道敷設工事の際の盛土である。第4層は耕土で鉄道が出来る前は水田であったことを示している。第５層は灰オリーブシルト質極細砂、第６層はにぶい黄褐シルト質極細砂、第７層は褐シルト質極細砂で平行堆積である。砂礫層を挟んでおらず、大きな洪水堆積物は存在しないことから、ある程度安定した地域と思われる。にぶい黄シルト質極細砂が地山で、地山を切り込んで東西方向に溝が掘られている。幅40cm、深さ45cmを測るしっかりした溝である。断面形状は逆台形で、埋土は黒褐シルト質極細砂で少量の炭を含んでいる。遺物は土師器小片しか出土していないが、中溝遺跡の時期と同じ中世の遺構と思われる。

水田から鉄道用地に組み込まれたことで、遺構面は良好に保存されている。今までの調査地点のように攪乱が認められず、遺構の残存状態が良かったものと思われる。

今回の試掘調査では、中世以前と思われる溝が検出され、中溝遺跡の遺跡範囲が西側まで延びていたことが明らかになったとともに中世の遺跡と考えていた中溝遺跡が弥生時代まで遡ることが明らかとなった。



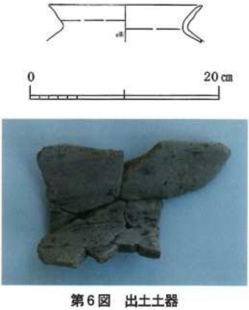
第5図　第2次調査　遺構図

令和元年度確認調査（第4次調査）

調査担当者　樋口　碧、渡辺　昇
調査の種別　確認調査
調査面積　8㎡
調査期間　令和元年12月18日(水)

当初協議していた福崎駅前整備事業は福崎駅周辺整備事業として、整備範囲が拡大され駅南側の県道田口福田線と町道駅南幹線と JR 播但線の囲まれた地域も商業施設を誘致するために整備事業が計画された。そのため、福崎町まちづくり課から発掘通知が出され確認調査を実施した。

周辺は駅前再開発に際して平成29年度・30年度にも試掘確認調査を実施したがコンクリート基礎があり調査不能か、すでに宅地などで遺構面が残存していない地域の西側に位置する。平成28年度に店舗予定地の北東部分を調査(遺構なし)しているので、北西部分に21G、南東部分に22Gを設定した。21Gは地表下約1mで地山を検出したが、間の層は安定した面はもちろんのこと自然堆積層も認められなかった。砕石を含めてすべて盛土である。第8層の暗褐シルト質細砂には材木や礫が掘りこまれていた。南側に材木店があり、その廃材などが埋められたものと思われる。22Gは砕石・2層の盛土の下は改良土層になっていた。鉄道敷設時の改良かと思われる。その下



第6図　出土土器

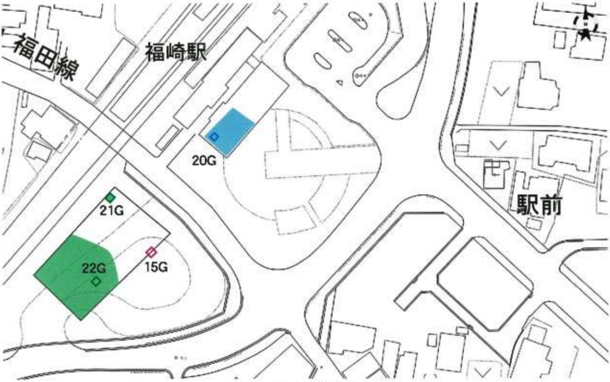
が包含層である黒褐シルト質極細砂があり、地山であるオリーブ褐シルト質極細砂が堆積している。地山面に溝が検出され、土師器が出土した。

22Gで遺構が検出されたことから、当該地南西部分は遺構が残存していることが判明したので開発部分について本調査を行うこととした。

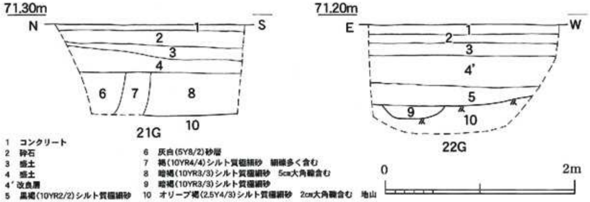
22G溝から土師器が出土している。図化したものは甕口縁部である。くの字で内面の稜線は甘く不明瞭である。端部は尖り気味で、口径16.2cmを測る。体部外面はハケ整形で細かい砂粒を多く含んでいる。古墳時代初頭の甕である。

番号	種別	器種	遺構	法量(cm)			調整	
				口径	器高	底径	外	内
1	土師器	甕	22G	(16.2)	残4.0		ハケメ	

遺物観察表



第7図　調査位置図



第8図　土層図

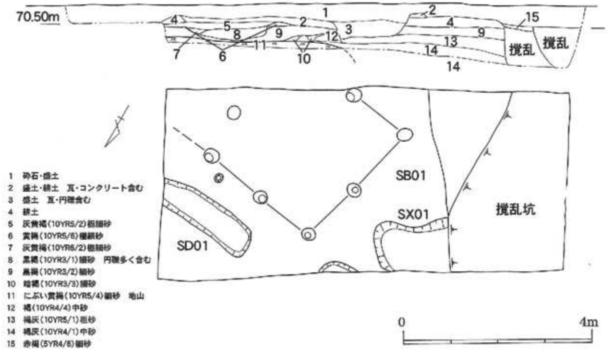
第2章　第1次調査結果

調査担当者　渡辺　昇（播磨町教育委員会）
調査の種別　本発掘調査
調査面積　34㎡
調査期間　平成28年12月19・20日
調査参加者　内藤隆夫・長谷川龍雄・藤本茂己・隅本　弘

第1節　遺構

試掘調査の結果、2か所で遺跡が確認され中溝遺跡と命名して遺跡発見通知を提出した。買収の進捗状況に合わせて調査を実施した。掘り下げは重機を用い、精査等においては人力により対応した。壁面の図化、写真撮影による記録を適宜行った。試掘調査結果をもとに開発者と協議を重ね掘削を伴う部分について本発掘調査を実施した。調査は平成28年12月19日(木)20日(金)の2日間を費やした。発掘調査については福崎町教育委員会が調査主体となり、藤澤工業株式会社に機械掘削を依頼し、人力掘削は直接雇用で実施した。

道路幅4mで調査を実施した。県道側溝から1.4mあけて本発掘調査を行った。側溝から2mのところに電力ケーブルが埋設されており、電力ケーブルを保全するために調査区を縮小した。一段下げた段階で放棄し、電力ケーブルの外側（側溝から3.4m）から調査を実施した。南側に向かって掘削を行ったところ、県道から約10mのところで攪乱坑が認められた。調査区幅全体に広がる面的な攪乱で、遺構面から40cm以上下がった攪乱坑である。地図などで確認したところ材木店が存在していたようである。遺構面が残存していないことを確認したので調査区をここまでとした。その結果、調査区は東西4m、南北8.5mと当初予定した面積よりも狭くなった。



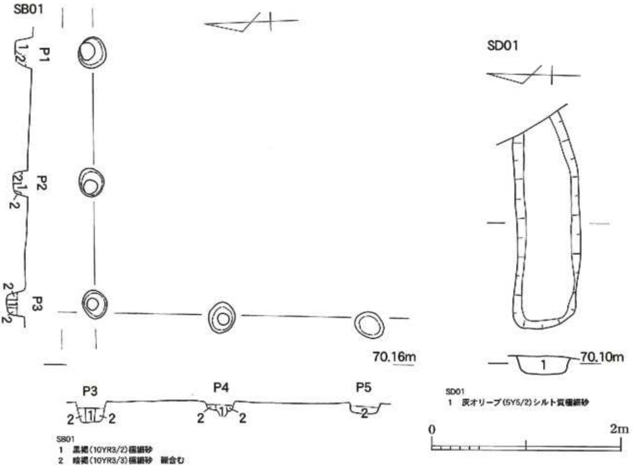
第9図　第1次調査　土層図・平面図

基本土層は盛土など一部細かく分層出来るが、大きくは4層から成る。第1層は盛土で上部は砕石で、第２層は耕土（一部は盛土である山土)、第３層は灰黄褐極細砂(耕土・礫含む)、第４層は灰褐～黒褐極細砂で、第５層が遺構面であるにぶい黄褐極細砂である。攪乱坑が多く見られ、表土層である砕石以外全体に広がる層はない。

検出した遺構は溝1条、ピット８基、落ち込み１基である。下面でピット2基を確認した。ピット８基のうち６基は一連の遺構で掘立柱建物に復元される。西壁沿いにある土坑状の遺構も同一遺構と思われる。調査区北側から約7mのところに大きな攪乱坑があり、コンクリート・煉瓦・ガラスなどを含んでいる。ただ、その手前から遺構面は落ち込み、旧河道が存在するようで、河川の洪水堆積物になっている。掘立柱建物が立地する微高地の東端と思われる。遺物は須恵器・土師器が少量出土している。中世期のもので、12世紀から14世紀の幅がある。遺構は中世後半と考えられる。

掘立柱建物（SB01)

６基のピットから構成され、調査区外へ延びている。南北2間、東西2間以上の建物である。ほぼ正方位に主軸を持ち、南北３m、東西2.7m以上となる。柱穴は径30cm前後で柱痕跡は15～20cmと大きなものではない。



第１０図　ＳＢ０１・ＳＤ０１実測図

溝（SD01）

溝は幅0.7m、深さ0.2mで断面形状は箱形である。調査区北側に延びており、長さ2.3m以上である。調査区南北に延び、中央が高くなった溝になる。

落ち込み（SX01）

落ち込みは調査区南側で検出している。最大長1.6mで新しい時期の遺構と思われる。

第2節　遺物

1は遺構面から出土した須恵器椀口縁部である。内湾し端部丸く納め、ロクロナデで仕上げている。口縁部に重ね焼きの痕跡が残っている。遺構は中世後半と考えられる。2×2間以上の掘立柱建物1棟と溝を検出した。小規模の集落が微高地上に存在したと思われる。

第11図　出土土器

遺物観察表

番号	種別	器種	遺構	法量(㎝)			調整	
				口径	器高	底径	外	内
1	須恵器	椀	遺構面	(14.0)	残2.6		ロクロナデ	ロクロナデ

第３章　第３次調査結果

調査担当者　樋口　碧、渡辺　昇
調査の種別　本調査
調査面積　250㎡
調査期間　平成30年８月２日（木）～平成30年８月17日（金）
作業委託　㈲松浦興業

第１節　遺構

調査対象地区の地目は、宅地であった。表面はコンクリートであったが、まちづくり課により剥いでもらい、建物及びウッドデッキ設置予定箇所に調査区を設定した。調査地点が駅前ということもあり、土置き場の確保が困難であったため、まず調査区の北東部の調査を行い、埋め戻した後に南西部の調査を実施した。

造成土の掘り下げは重機を用い、包含層の掘り下げと遺構面精査等は人力により対応した。壁面の図化、写真撮影による記録を適宜行った。重機によって埋戻し作業も行った。

層序は、第１層が砕石、第２層が灰白シルト質細砂、第３層は黄褐シルト質細砂、第４層はオリーブ褐シルト質細砂、第５層は暗褐シルト質中砂で、調査区の東側から第６層は暗褐シルト質細砂が堆積している。地山は砂質で安定した面もあるが、調査区東側では礫層も見られ、洪水によるものと考えられる。

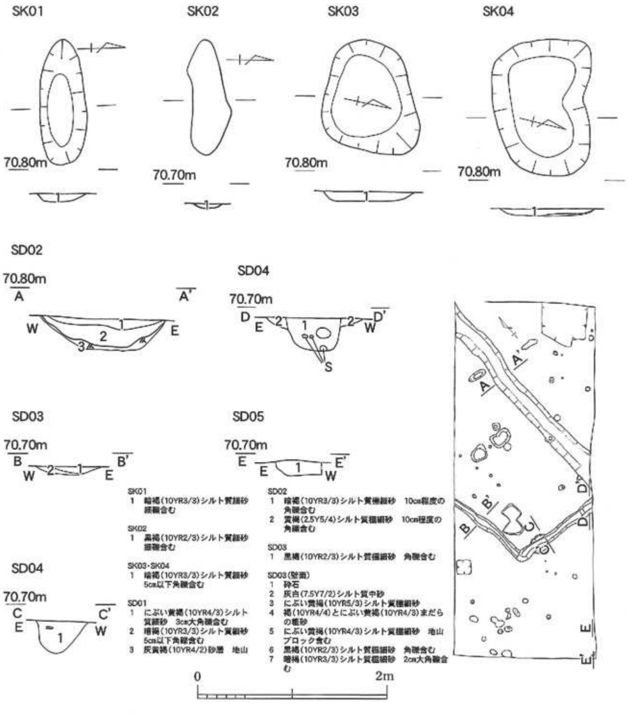
検出した遺構は、溝４条、土坑６基、ピットである。

調査区東側の溝をSD02、西側の南北方向の溝をSD03、東西方向の溝をSD04、調査区南西隅で検出した溝をSD05とする。SD02は、幅1.3～1.7m、深さ40～50cmを測り、調査区の南北方向に延びている。断面は箱掘状で、奈良時代の須恵器蓋等が出土している。SD03も同様に南北方向の溝で、調査区の北方向に延びており、南側は調査区中央付近でSD04と接続している。幅0.5～0.7m、深さ0.07～0.08mを測る。SD04は調査区の東側に延びているように見えるが、SD02と切り合い関係にあると思われる。幅0.6～0.8m、深さはSD03との接続部分付近で0.32m、東にいくにつれ浅くなり、0.16～0.18mとなるが、調査区南壁付近でまた深くなり、0.3m程度となる。溝の中央付近では１辺1.3m、深さ0.1m程度の浅い掘り込みがあり、出土遺物がないため時期は不明だが、切り合い関係にある遺構の可能性がある。SD03、SD04ともに弥生土器片が出土した。SD05は、調査区隅で検出したため全容は不明だが、東西方向に延びると思われる。遺物は出土していない。

土坑は６基検出したが、性格の分かるものはなく、遺物も出土していない。SK01は幅0.5m、長さ1.32mの楕円形、SK02は幅0.4m、長さ1.26mの不整形な土坑で、調査区の北側から検出した。SD02を挟んで直線上に並んでいる。SK03、04は不整形な楕円形を呈しており、SD02の北東側に、垂直方向に並んでいる。SK03は0.9×1.2m、SK04は0.95×1.45mで深さはともに0.1～0.2mである。SK05は一辺約1.1mの方形、SK06は1.1×1.1mの不整形な平面形を呈しており、両者は切り合い関係にある。SK05の方が新しいと思われる。深さはともに0.1m弱で、遺物は出土していない。SD03の東側に近接して確認された。

ピットはP3、P5のみ柱痕が残っており、P3からは土師器片が出土したが、小片のため時期は不明である。P1とP9はSD02に切られていることから、奈良時代以前の遺構と考えられる。

遺構は、調査区の中央から北東側に広がっており、西側にいくにつれ希薄になっていくものと思われる。SD05が確認されたことから、遺構は東西方向に広がっているものと考えられる。

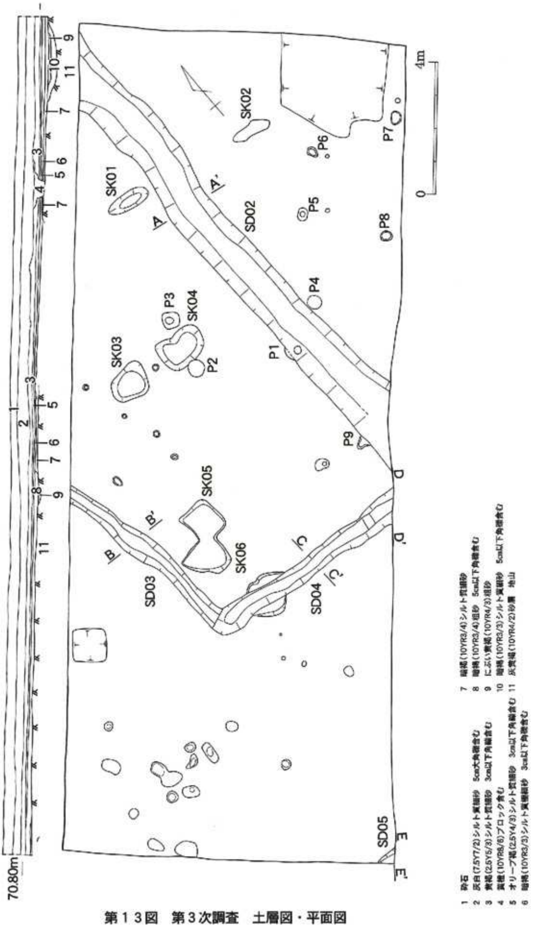


第12図 第3次調査 遺構図

まとめ

中溝遺跡は中世の遺構として知られていたが、今回の調査では弥生時代と奈良時代の遺構が確認された。今回の調査地点から南西方向に100m離れた地点で実施した第1次調査では、中世の掘立柱建物が見つかっている。

この付近で弥生時代から中世にかけて遺構が継続して存在していた可能性を示唆するものとなった。

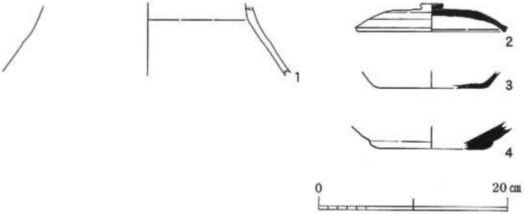


第13図 第3次調査 土層図・平面図

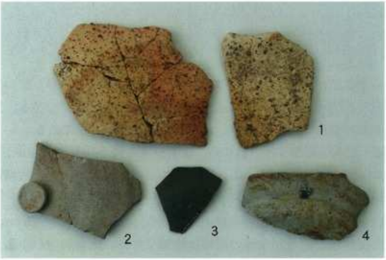
第2節　遺物

出土遺物は少量である。弥生土器と須恵器が出土している。

１は弥生土器壺肩部である。前期の壺で比較的直線的に延び、内傾し頸部に続く。２～４は須恵器で、２は杯蓋で低いボタン状のつまみが平坦な天井部に付く。口縁部は外傾し端部肥厚する。３は杯A底部で平底から外傾する体部に続く。４は東播系須恵器捏鉢底部である。突出平底から外傾する。



第１４図　出土遺物実測図



番号	種別	器種	遺構	法量(cm)			調整	
				口径	器高	底径	外	内
1	弥生土器	壺	SD03		残7.7			
2	須恵器	杯蓋	SD02		残2.95	(15.5)	ヘラケズリ・ロクロナデ	ロクロナデ・ナデ
3	須恵器	杯	SD02		残1.7	(11.2)	ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ・ナデ
4	須恵器	鉢	排土		残2.9	(11.4)	ロクロナデ・ナデ	ロクロナデ

遺物観察表

第４章　第５次調査結果

調査担当者	樋口　碧・渡辺　昇
調査の種別	本発掘調査
調査面積	560㎡
調査期間	令和２年２月３日～２月26日
作業委託	安西工業㈱

調査に至る経過

平成28年度から福崎駅前整備事業に先立って、埋蔵文化財の有無を確認するために試掘調査を随時実施してきた。一部で埋蔵文化財が確認され中溝遺跡として登録し、開発部分については２回の本発掘調査を実施した。今回新たに南側に位置する仮のバス停留所部分に開発が計画された。確認調査を行ったところ南側で遺構が確認されたので、本発掘調査を実施した。

調査の方法

調査対象地区の地目は、元は宅地・道路などであった。再開発事業による宅地撤去後に更地となり、バスターミナル、駐車場になっていた。確認調査の結果、アスファルト、砕石、盛土があり、砕石下約50cmは駅前整備事業で改良されていた。この深さまでをまちづくり課施工によって掘削し、その下から調査に着手した。上面を機械掘削し、その下を人力によって掘り下げた。遺構面の精査や遺構掘り下げ等においては人力により対応した。壁面の図化、写真撮影による記録を適宜行った。

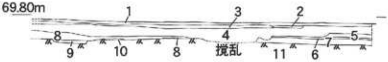
第1節　遺構

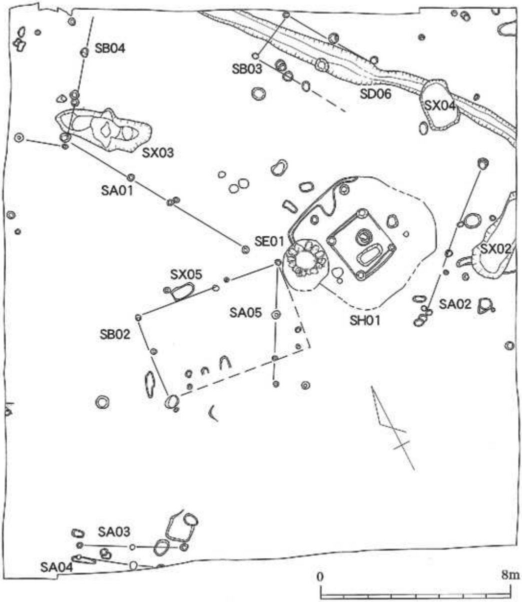
遺構面には多くの攪乱坑が存在したものの、遺構面はかろうじて残存していた。検出した遺構は、竪穴住居・掘立柱建物・柵・溝・落ち込み・土坑・ピット・井戸である。遺物は弥生時代中期から近世のまでのものが出土しているが、大半は弥生時代の土器である。

層序は盛土の下に、にぶい黄褐シルト質中砂、黄褐シルト質中砂、黒褐シルト質中砂が堆積し、地山である黄褐シルト質細砂になっている。地山上の黒褐層は弥生時代～古墳時代の包含層である。遺構はすべて地山面で検出した。

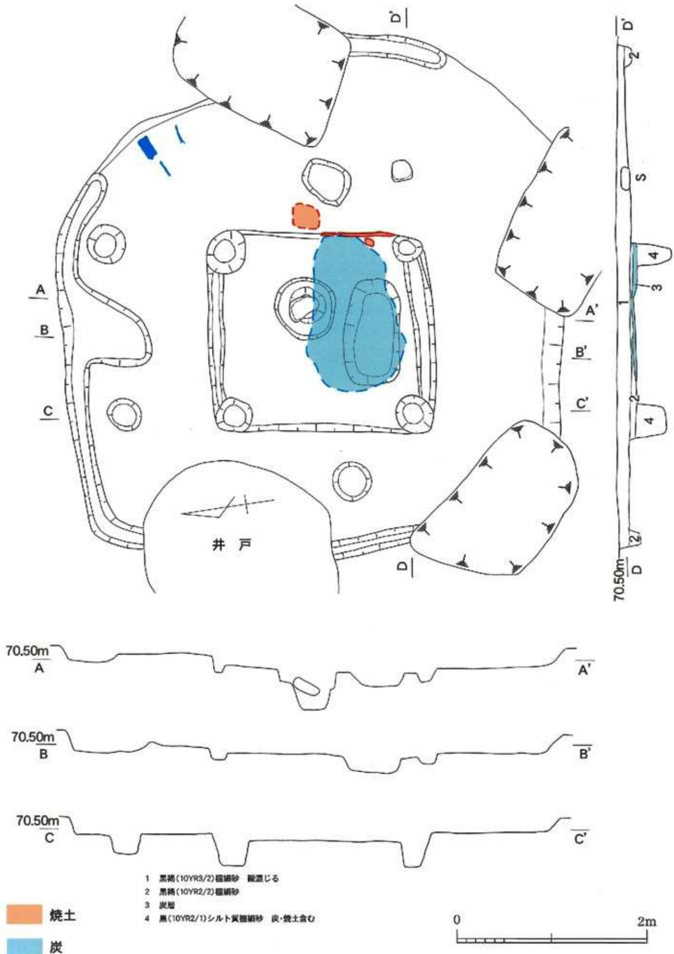
竪穴住居（SH01）は調査区中央南寄りで検出している。南北5.3m、東西5.5mの隅円方形のプランである。４か所の攪乱坑があるが全体の規模は把握できる。南側の方が上層からの影響を強く受けており残りが悪い。北半には壁溝が巡る。幅0.2m前後である。北辺中央に土坑が築かれている。幅0.8m、長さ0.7mの不定形で、壁溝から南（住居中央）に向かって浅くなっている。土坑南端は深さ0.1mと浅い。土坑を中心に1対のピットが存在する。床面は高床部と低床部があり、中央に南北2.1m、東西2.4mの方形に低床部が0.1m下げられている。南北２辺だけ壁溝が認められる。コーナーにピットが設けられている。北辺のピットは低床部ピットと1列に並んでいる。低床部ピットは最大0.5mと深いが、北辺のピットは0.2mと浅い。床面中央やや東寄りに径0.65mの円形土坑が南側に幅0.6m、長さ1.1mの方形土坑が設置されている。播磨周辺で特有の1〇土坑である。方形土坑には炭が詰まっていた。円形土坑は2段になっており、台石が上段から出土している。床面全体に炭化材が広がっており、焼土も認められることから、焼失住居である。出土土器は少量であるが、弥生時代末の時期である。

1　コンクリート
2　砕石
3　砕石
4　改良土
5　にぶい黄褐(10YR5/3)シルト質中砂
6　黄褐(10YR5/6)シルト質中砂
7　黒褐(10YR3/2)シルト質中砂
8　7と同じ
9　暗褐(10YR3/3)シルト質中砂
10　にぶい黄褐(10YR4/3)シルト質中砂
11　黄褐(10YR5/6)シルト質細砂　地山

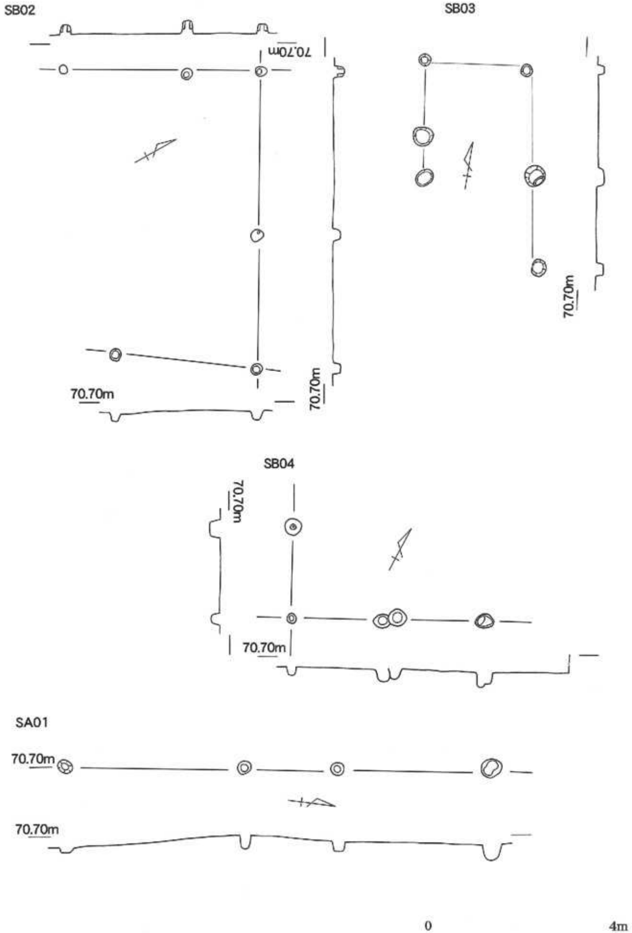




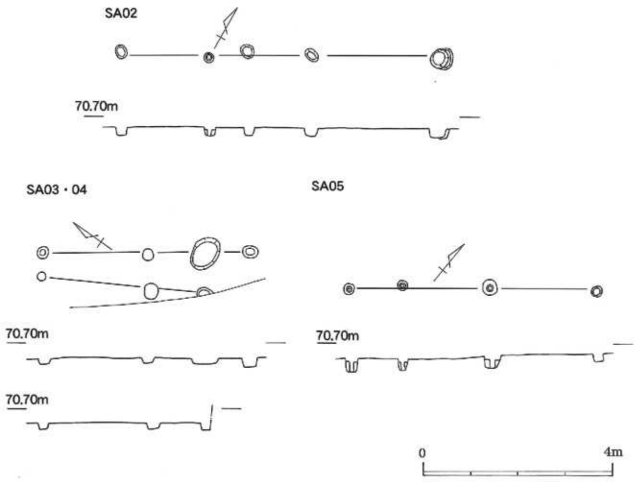
第１５図　第５次調査　土層図・平面図



第１６図 ＳＨ０１実測図



第１７図　ＳＢ０２～０４、ＳＡ０１実測図



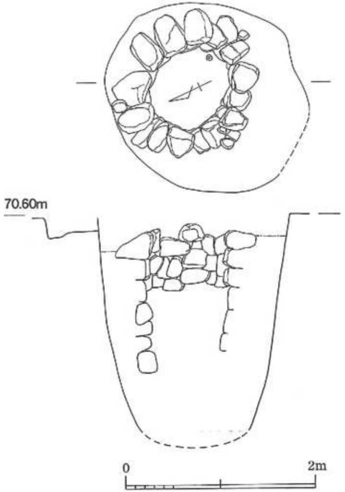
第18図　ＳＡ０２～０５実測図

掘立柱建物(SB02～04)は３棟確認した。撹乱が多く認められることから全体像は明らかでない。主軸方位が３棟とも異なるので、別時期と思われる。SB02は弥生時代から古墳時代、他の2棟は古代～中世と思われる。

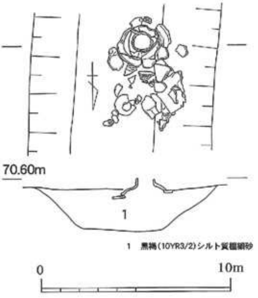
柵(SA01～05)は５基検出している。SA01は３間調査している。SB04と主軸方向が同じなので、同じ時期の遺構と思われる。南北に延びる可能性は残る。SA02は東西方向の柵で3間検出しており、西側に延びる可能性と南側に延びて掘立柱建物になる可能性がある。SA03とSA04は調査区西端で確認しており、延びる可能性がある。SA05は調査区中央で検出した２間以上の柵であるが、周辺が撹乱を受けていることから明確でないが、掘立柱建物の可能性がある。

溝(SD06)は調査区東側にあり南北に延びている。緩やかな弧は描いているが全体的にはほぼ南北に延びている。底面の高低差はほとんどない。断面形状は逆台形で、溝内からはあまり土器は出土していないが、上面に多くの土器が置かれていた。器種は高杯・器台が多く、出土状態からも祭祀的な性格が想定される。他地域の影響を受けた土器が多く出土しているのが特徴である。

落ち込み(SX)は3基調査した。SX02は東端に位置しており、調査区外に延びている。幅1.2m、長さ3.8mを測り、断面は箱形である。深さ0.4mである。出土遺物から弥生時代中期後半の遺構である。SX03は北側で検出した幅1.5m、長さ4mの先のとがった不定形を呈しており、底面も平坦でなく歪である。深さは0.8mとやや深い。SX04は溝SD06を切った長方形の落ち込みである。



第１９図　ＳＥ０１実測図



第２０図　ＳＤ０６実測図（出土状態図）

北辺が丸みを持ち、短辺1.3m、長辺2.9mを測る。遺物は小片しかなく、時期は不明であるが、SD06を切っていることから古墳時代以降である。SX05は調査区中央のSB05の北辺沿いに位置している。南北0.5m、東西1.0m、深さ0.2mの長方形の落ち込みである。出土遺物から溝SD06や竪穴住居SH01・掘立柱建物SB02と同時期の弥生末の遺構である。

井戸は石組で中世末～近世と思われる。

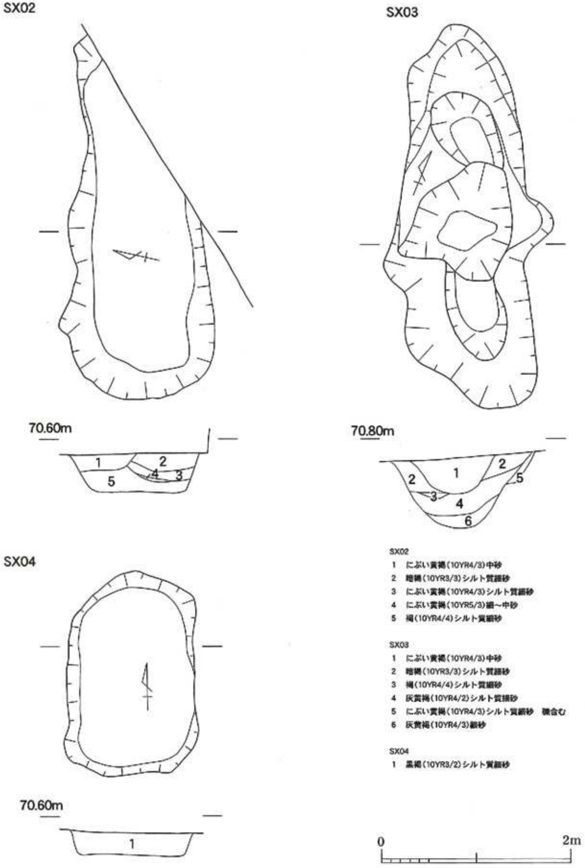
弥生時代中期後半の落ち込みと弥生時代末の竪穴住居・溝・掘立柱建物を確認した。第３次調査でも弥生時代の遺構を確認したが、中期から末にかけて安定して生活していたことが判明した。出土土器の中に他地域との交流を示す土器が多くみられたことも当時の交流関係を表す資料である。古代中世にかけても掘立柱建物・柵があることから集落を営んでいることが明確になった。

第２節　遺物

出土遺物はコンテナ５箱出土している。弥生土器が大半で石器と須恵器・土師器が確認され、73点図化した。

SH01出土土器（1～7）

１～４は甕口縁部で、１は外反し端部丸く、２・３は外反し端部角張る。ハケ整形からヨコナデ仕上げ。４はくの字で端部内側に曲げ端面を形成している。外面タタキ成形で口縁部を折り曲げている。内面はヘラケズリからハケ整形。５・６は底部再成形する突出平底の壷底部である。５は薄く仕上げられ胎土精良である。６は断面黒で器表はにぶい黄橙を呈する。磨滅しているが、タタキ成形ののちナデと思われる。7は強く被熱した脚台部である。土器は庄内平行期となる弥生終末の遺物である。



第２１図　ＳＸ０２～０４実測図

SX02（8～19）

8～10は壺で口縁端面に凹線を有し、口縁端部肥厚している。8は3条、9は4条、10は磨滅のため不明確である。11～14は甕口縁部である。12は頸部稜線明瞭で口縁部バチ形で端部肥厚する。14は口縁部短く如意形で古相を示す。15は形状から甕底部と思われるが、器壁が厚いことから壺の可能性もある。16は口縁端部を折り曲げて玉縁状にしたものである。遺構内から出土しているが、弥生土器とは思えない。近接して攪乱があることから後世の夾雑物で陶器鉢口縁部であろう。17は内湾する鉢口縁部で、端部丸く納める。18は壺口縁部である。外反し端部肥厚している。19は蓋である。つまみ部が大きく中実で重量感がある。上端部は左右に水平にナデによって広がっており、やや湾曲している。端部から直線文－波状文－波状文－直線文と４帯の装飾を全体に施し、つまみ部も縦方向に波状文を施す装飾過多である。端部近くに２個１対の円孔が認められる、本体との緊迫による円孔で、反対側は残存していないので不明であるが対称の位置にもあったと思われる。装飾性豊かな特徴的な土器である。16を除き中期後半の土器である。

SX04出土土器（20・21）

20は甕体部で、外面に右上がりのタタキメが施される。幅広の原体で時計回りに施文している。５個１単位であろうか。頸部内面にはユビ成形ののちヘラケズリ、ナデである。体部は内湾し頸部稜線は甘い。21は壺底部で平底から外傾する。底部に黒斑が認められ、内面は灰色を呈する。

SD06出土土器（22～54）

22～33は壺である。22は外反し端部肥厚する口縁部で口唇面に施文されていない。23・24は二重口縁壺で、23は大形で内面の稜線は不明瞭で、外面は突帯状になる。器壁は薄く端部尖っている。ヨコナデ仕上げで、表面剥離顕著であるが、外面は化粧土を塗布していたと思われる。24は直に延びる頸部から水平に広がり明瞭な稜線を持って外傾する口縁部になる。端部近くでさらに反り気味に外傾し端部内側に肥厚する。内外ともハケ整形ののちナデている。粘土紐の継ぎ目、特に擬口縁部は明瞭である。端面磨滅しているが、９条以上の擬凹線が施されている。25は外反する口縁部で端部丸い。強いヨコナデで頸部に段が出来ている。ハケ整形。26は僅かな稜を有する短い二重口縁で端部丸く仕上げ、被熱している。胎土に小石粒が入っている。27は外反し端部尖り気味である。被熱しており、内面も煤付着している。器壁は厚めである。28は体部球形で口縁部外傾し端部尖る長頸壺である。内外面ともハケ整形であるが、内面原体は粗いことから貝殻かもしれない。29は外傾し端部やや肥厚する口縁部で強いヨコナデで仕上げている。外面端部下は沈線状に凹んでいる。やや新しい要素を持っていると思われる。30は外反する口縁部で端部尖り気味で化粧土を塗布している。内外面ともヘラミガキで丁寧に仕上げている。31は内湾する体部で綾杉文が施されている。32はやや不安定な平底から内湾する体部になる。螺旋状のタタキ成形で黒斑が認められる。33は高台状の突出した底部で再成形の指圧痕が残っている。内面にはくもの巣状ハケに見られるようなヘラ工具痕が認められる。体部は内湾する。内外面ともミガキではないが、ナデで丁寧に仕上げている。

34～43は甕である。34は大形で口縁部を欠くが、短くくの字になる弥生中期後半のものであろう。内面は粗いハケ整形を複数方向に施し磨滅顕著。35は頸部湾曲し、稜線を有さない。強いヨコナデで口縁外面下半が浅い段になっている。体部内面はヘラケズリ。36は磨滅顕著な口縁部で僅かに外反しヨコナデ。端部に肥厚気味の新しい要素を持つ。37は内湾する体部で外面右上が

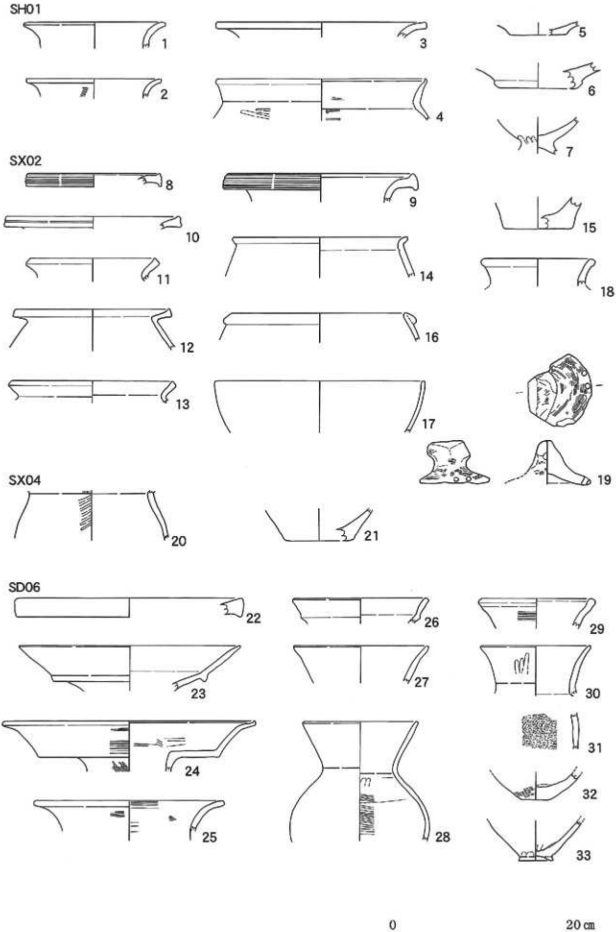
のタタキを施し内面ヘラケズリである。口縁部外反し、端部近くで短く屈曲し端面となってつまみ上げる。北側の影響を受けている。38も外反する口縁部で端部肥厚ぎみである。ヨコナデ仕上げで体部内面はケズリであろう。39は特徴的な形態の口縁部である。外傾し角度を変え、大きく折り曲げて端部は内傾させ端部尖らす。地元の胎土と思われるが、北側からの影響を受けた形状を呈している。磨滅しているがヨコナデと思われ、色調は断面サンドイッチ状になり中央が黒い。40～43は底部で、40は小さな平底から体部外傾する。黒斑が見られる。41は被熱している。平底から外傾し、外面ハケ整形だが底部周辺はナデ仕上げで、底面も調整している。42は上げ底で、体部直線的に延びる。外面はタタキののちナデ仕上げ。43は突出平底から外傾する。器形は甕の形状であるが、器壁が厚く外面を塗布していることから壺の可能性がある。外面はミガキに見える。

44は鉢である。内湾気味に直立する口縁部で内側に大きく肥厚している。上部に大きな端面を作り、3条の凹線文を施す。全体にヨコナデであるが、内面には成形時の指圧痕が認められる。前代(弥生中期)の混入である。

45～48は高杯である。45は脚部で外傾する筒部から反り気味に大きく開き端部丸くなる。裾部はハケ整形。筒部は中空で外面はヘラミガキである。46は図上で完形になったもので、裾部内面はハケ整形からナデ仕上げである。外面はナデ調整とヘラミガキを施している。円孔は４方向でやや高い位置にある。筒部は中実で上下にやや開く形状となり、ヘラミガキで仕上げている。筒部と裾部の間に凹線が１条あるが、１周はしていない。接合時の整形痕であろうか。筒部上面が丸く下がっている。円板充填で外れたかの形状であるが、中実である。杯部は内湾し口縁端部近くで屈曲し端部は内側に肥厚している。内外面ともにハケ整形ののちナデ仕上げ。47・48は筒部で、47は中実で磨滅著しい。48は中空で裾部緩やかに広がっている。円板充填法で、外面はハケ整形からヘラミガキ。内面はケズリか、ヘラで調整している。

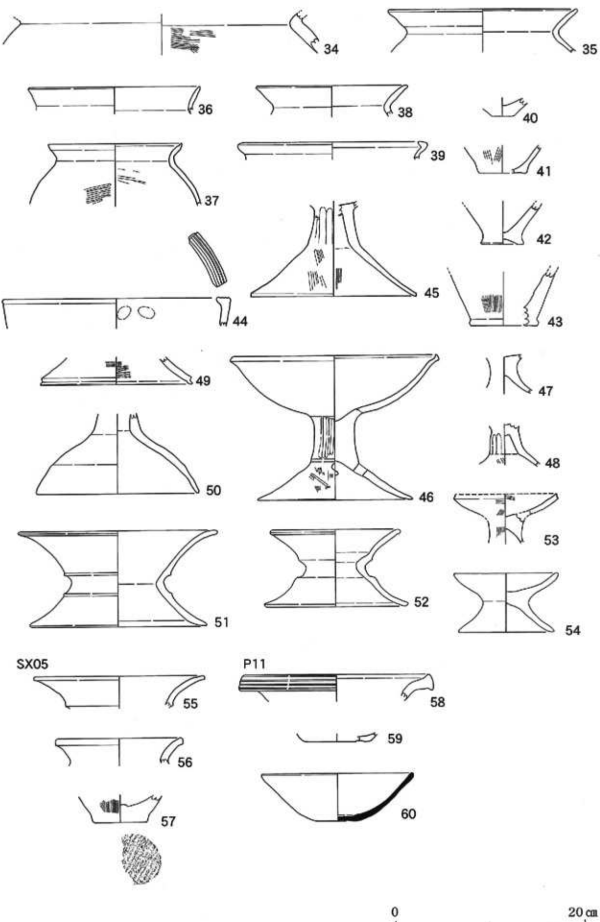
49～54は器台である。49・50は下台部で49は外反し端部を大きくつまみ出している。粗いハケ整形ののち、外面は粗いヘラ調整を施している。50は特徴的な形態をしている。半球状の内湾する下台で端部丸くなる。内面はヘラケズリで端部周辺はヨコナデ仕上げ。内外面とも化粧土を塗布しており、ヘラミガキで仕上げている。胎土はチャート・雲母などの小石粒を含んでいる。51・52は鼓形器台である。大きさに違いはあるが、ほぼ同じプロポーションをしている。筒部は短くなっている。上下台ともに外反し端部丸い。内面はヘラケズリ、外面と端部はヨコナデである。砂粒多く含んでいる。51の方が大きく、稜線は鋭くなっている。表面磨滅の差かもしれないが、色調は52の方がより赤味が強く黒斑がある。53・54は小形器台で、53は上台部である。内湾し端部角張り、上方につまみ上げている。内外面は不定方向の強いハケ整形である。筒部は中実で内面はナデ調整。54は定型化されていない地方色のある器台である。上台は内湾し端部丸い。筒部は中実で上下から粘土を補填しておりユビ仕上げである。外面には指圧痕が認められる。下台は外反し端部尖り気味である。ハケ整形ののちナデで調整している。工具痕が残っている。

SD06出土土器は弥生中期後半の土器を数点含んでいるものの、それらは磨滅しており前代のものであることが歴然としている。それ以外は弥生時代末期の一括性のある良好な資料である。他地域の土器特に山陰の土器が多く含まれることは貴重な資料である。

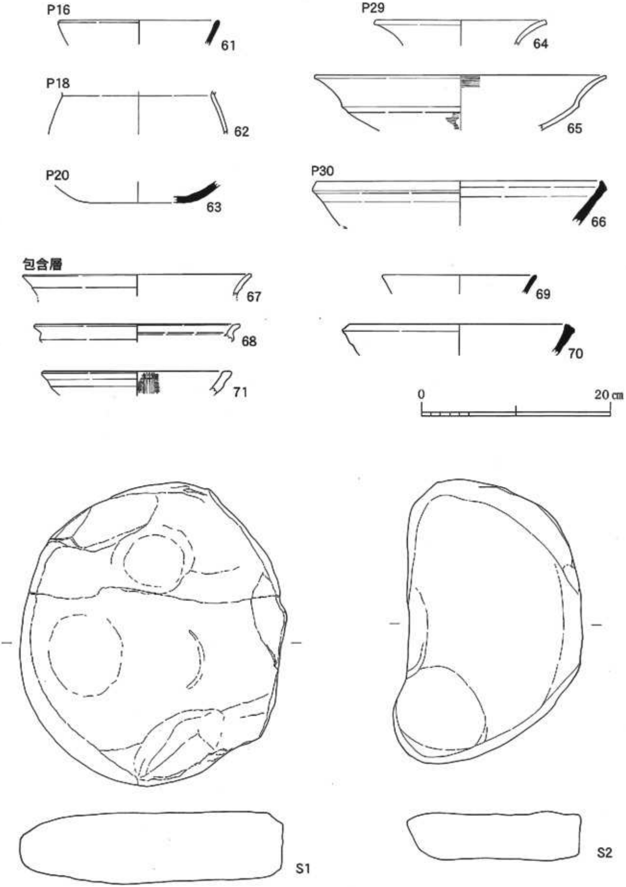


SH01
1
2
3
4
5
6
7
SX02
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
SX04
20
21
SD06
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
0
20 cm

第２２図　遺物実測図（１）


34
35
36
38
40
37
39
41
42
45
43
44
49
47
50
46
48
53
51
52
54
SX05
P11
55
58
56
59
57
60
0
20 cm

第２３図　遺物実測図（２）


P16
61
P29
64
P18
62
65
P20
63
P30
66
包含層
67
69
68
70
71
0
20 cm
S1
S2
0
20 cm

第２４図　遺物実測図（３）

SX05出土土器（55～57）

55～57はSX05出土である。55は二重口縁壺で化粧土を塗布している。外反し端部丸い。稜線は通常で明確である。石粒を含んでいる。56は外反し端部少し肥厚し端面となる。器壁が厚めであるが甕としておく。ヨコナデである。内面に黒斑が認められる。57は突出平底でタタキ底である。底部再成形で指圧痕が残り外面は細かいハケ整形である。内面はユビ成形のままである。大きな石粒を含んでいる。3点とも弥生末期の土器でピットの時期を示すものと思われる。

ピット出土土器（58～66）

58～60はP11出土である。58は弥生時代中期後半の壺口縁部である。外反し端部内外に肥厚している。端面に３条の凹線文を施している。ヨコナデ仕上げである。59は土師器杯底部でヘラ切りである。砂粒を含んでいる。古代かと思われる。60は須恵器椀で糸切り底である。内湾し端部近くで肥厚している。重ね焼き痕が残る。色調などから西播磨産と考えられる。

61はP16出土の須恵器椀口縁部である。外傾し端部丸くロクロナデである。62はP18出土の土師器甕体部である。内湾しユビ成形ののちナデ調整している。粘土紐の継ぎ目明瞭で、赤色粒などの砂粒含んでいる。63はP20出土の須恵器鉢底部である。不安定な平底から体部内湾する。底部は未調整で体部外面はロクロケズリである。捏鉢ではないと思われる。64・65はP29出土の弥生土器である。64は壺口縁部で二重口縁であろう。外反し端部やや角張り気味に仕上げる。ヨコナデで化粧土を塗布している。65は高杯で強い2次焼成を受けている。下半は内湾し明瞭な稜線を有して大きく外反する口縁部になり端部角張り気味。ハケ整形ののちナデ・ヨコナデで仕上げる。66はP30出土の須恵器捏鉢口縁部である。外傾し端部角張る。端部肥厚させ内側につまみ出し端面になっている。

包含層出土土器（67～71）

67・68は土師器甕口縁部である。67は外反し端部丸い。68は二重口縁で屈曲し短く外反する。ヨコナデ仕上げ。69は須恵器椀口縁部で外傾し端部丸い。70は須恵器捏鉢口縁部で内湾し端部肥厚し角張る。71は須恵器擂鉢であるが、形態などは土師器のものと同タイプである。横方向から縦方向へ施している。

出土石器（S1～S3）

S1はSH01床面から出土している。台石で数か所に敲打痕が認められる。流紋岩と思われ、河原石を利用したと思われる。S2はSH01中央土坑から出土している。形態は異なるが、S１同様の流紋岩で台石である。SH01の性格を表す遺物である。他に図化していないが２点台石の可能性が高いものが出土している。S3はP27出土の砥石である。約３分の１を欠失している。４面を利用しており、中央が最も凹んでいるものと思われる。

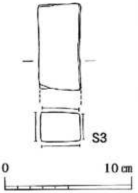
土器観察表

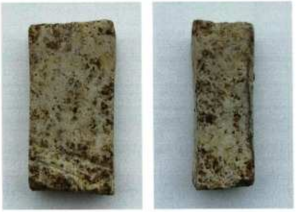
番号	種別	器種	遺構	法量(cm)			調整	
				口径	器高	底径	外	内
1	弥生土器	甕	SH01　東半	(14.8)	残2.8		ナデ	
2	弥生土器	甕	SH01　0土坑	(14.0)	残2.1		ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ
3	弥生土器	甕	SH01　P1	(22.0)	残1.6		ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ
4	弥生土器	甕	SH01　1土坑	(22.0)	残4.4		タタキの後ナデ	ヘラケズリ　ハケメ
5	弥生土器	壺	SH01　東半		残1.4	(6.0)	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ
6	弥生土器	壺	SH01　東半		残2.8	(8.4)	タタキ　ナデ	ユビナデ
7	弥生土器	鉢	SH01　東半		残3.8		ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ	ヨコナデ
8	弥生土器	壺	SX02	(13.8)	残1.4		ヨコナデ	ヨコナデ
9	弥生土器	壺	SX02	(19.4)	残3.0		ヨコナデ？	ヨコナデ？
10	弥生土器	壺	SX02	(18.0)	残2.1		ヨコナデ	ヨコナデ
11	弥生土器	甕	SX02	(10.0)	残2.4		ヨコナデ	
12	弥生土器	甕	SX02	(16.0)	残3.5		ヨコナデ	ヨコナデ
13	弥生土器	甕	SX02	(16.8)	残2.3		ヨコナデ？	ヨコナデ？
14	弥生土器	甕	SX02	(18.0)	残4.3		ナデ	
15	弥生土器	甕	SX02		残3.4	(7.2)	ヨコナデ	ヨコナデ
16	陶磁器	鉢	SX02	(18.0)	残3.0		ヨコナデ	ヨコナデ
17	弥生土器	鉢	SX02	(22.0)	残5.5		ヨコナデ	ヨコナデ
18	弥生土器	壺	SX02	(11.2)	残2.8		ヨコナデ	ヨコナデ
19	弥生土器	蓋	SX02外の西側　面精査	(9.0)	残4.6		波状文	
20	弥生土器	甕	SX03		残5.2		タタキ	ヘラケズリ、ナデ
21	弥生土器	壺	SX03		残3.4	(7.2)	ヨコナデ	ヨコナデ
22	弥生土器	壺	SD06	(23.6)	残2.0		ナデ	
23	弥生土器	壺	SD06	(23.0)	残4.8		ヨコナデ	ヨコナデ
24	弥生土器	壺	SD06		残4.3		ハケの後ヨコナデ	ハケの後ヨコナデ
25	弥生土器	壺	SD06	(19.6)	残4.2		ハケの後ヨコナデ	ヨコナデ
26	弥生土器	壺	SD06	(14.0)	残2.7		ヨコナデ	ヨコナデ
27	弥生土器	壺	SD06	(14.0)	残4.0			
28	弥生土器	壺	SD06	(12.0)	残12.7		ハケメ	ユビナデ、ハケメ
29	弥生土器	壺	SD06	(11.3)	残3.2		ヨコナデ	
30	弥生土器	壺	SD06　東半	11.6	残5.3		ハケメの後ヘラミガキ	ヘラミガキ
31	弥生土器	壺	SD06		残3.8		ハケメ、綾杉文	ユビオサエ
32	弥生土器	壺	SD06		残3.0	3	タタキ	ユビオサエ
33	弥生土器	壺	SD06		残4.0	3.5	ナデ･ユビオサエ	ナデ
34	弥生土器	甕	SD06		残4.3		ナデ	ハケメ
35	弥生土器	甕	SD06	(19.6)	残4.5		ヨコナデ	ヘラケズリ
36	弥生土器	甕	SD06	(18.0)	残2.9		ヨコナデ	ヨコナデ
37	弥生土器	甕	SD06	(14.0)	残6.7		タタキ	ヘラケズリ
38	弥生土器	甕	SD06　東半	(15.6)	残3.3		ヨコナデ	ヘラケズリ
39	弥生土器	甕	SD06	(18.0)	残1.9		ヨコナデ	ヨコナデ
40	弥生土器	甕	SD06		残1.9	2.2	ミガキ	ハケメ
41	弥生土器	甕	SD06		残3.0	(5.0)	ハケメ	ヨコナデ
42	弥生土器	甕	SD06　東半		残4.1	(4.5)	タタキ、ナデ	ナデ
43	弥生土器	甕	SD06　東半		残5.5	(7.3)	ミガキ、ナデ	ナデ
44	弥生土器	鉢	SD06	(23.8)	残3.1		ヨコナデ	ヨコナデの後ユビオサエ
45	弥生土器	高杯	SD06		残9.95	(17.4)	ハケメの後ミガキ	ハケメ、ヨコナデ、ナデ
46	弥生土器	高杯	SD06	(21.4)	15.25	(16.2)	ハケメ、ミガキ	ハケメ
47	弥生土器	高杯	SD06		残4.1		ケズリ？	ナデ、ヨコナデ
48	弥生土器	高杯	SD06　東半		残4.5		ハケメ、ミガキ	ケズリ
49	弥生土器	器台	SD06		残2.9	(20.0)	ハケメ	ハケメ
50	弥生土器	器台	SD06		残8.5	(17.0)	ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ

番号	種別	器種	遺構	法量(cm)			調整	
				口径	器高	底径	外	内
51	弥生土器	器台	SD06		残5.2		ヨコナデ	ヘラケズリ
52	弥生土器	器台	SD06	13.4	8.2	14.6	ヨコナデ	ヘラケズリ
53	弥生土器	器台	SD06	(10.4)	残5.3		ハケメ	ハケメ
54	弥生土器	器台	SD06	(10.6)	6.2	(9.8)		ハケメ、ユビナデ
55	弥生土器	壺	P07	(18.0)	残3.4		ヨコナデ	ヨコナデ
56	弥生土器	甕	P07	(13.0)	残2.9		ヨコナデ	ヨコナデ
57	弥生土器	甕	P07		残2.8	5.6	ハケメ	未調整
58	弥生土器	壺	P11		残2.8		凹線文	
59	土師器	杯	P11		残0.8	(7.0)		
60	須恵器	椀	P11	(16.0)	5.1	(4.0)	ロクロナデ	ロクロナデ
61	須恵器	椀	P16	(16.6)	残2.7		ロクロナデ	ロクロナデ
62	土師器	甕	P18	(18.5)	残4.7		ユビナデ	
63	須恵器	鉢	P20		残2.3	10.0	ヘラケズリ	ロクロナデ
64	弥生土器	壺	P29	(18.0)	残2.7		ヨコナデ	ヨコナデ
65	弥生土器	高杯	P29	(30.4)	残5.85		ハケメ、ヨコナデ	ハケメ
66	須恵器	鉢	P30	(30.0)	残4.7		ロクロナデ	ロクロナデ
67	土師器	甕	東壁	(24.0)	残2.3		ヨコナデ	ヨコナデ
68	土師器	甕	東壁	(21.4)	残1.9		ヨコナデ	ヨコナデ
69	須恵器	椀	包含層	(16.0)	残2.0		ロクロナデ	ロクロナデ
70	須恵器	鉢	包含層	(22.6)	残3.3		ロクロナデ	ロクロナデ
71	須恵器	擂鉢	面精査	(20.0)	残2.6		ロクロナデ	ロクロナデ

石器観察表

番号	種別	器種	遺構	法量(cm)			備考
				長さ	幅	厚さ	
S1	石器	台石	SH01　床面	32.2	28	7.5	
S2	石器	台石	SH01　中央土坑	30.1	20	5.4	
S3	石器	砥石	P27	残6.75	3.45	2.3	





第２５図　遺物実測図（４）

第5章　おわりに

中溝遺跡は福崎駅前整備事業に伴って確認された遺跡である。平成28年度～令和元年度にかけての試掘確認調査、平成28・30年度・令和元年度に行った3回の本発掘調査、試掘調査終了後から実施した整理調査によって多くの知見を得た。当初は駅前で住居・商業施設などの開発が進み、遺跡存在の可能性も低いと思われた。福崎駅や播但線関連の前代の鉄道関連遺構の確認や近世の屋敷地確認が期待された。

試掘調査の結果、広い範囲で近現代の建物が広がり、近世以前の遺構面はほとんど確認することが出来なかった。ただ、近代以前に複数の洪水堆積層が確認され、自然の可能性が高い溝状遺構を複数検出した。洪水堆積層の上に安定した面を見出し、多少位置を変えて生活したと思われる。試掘調査13Gと16Gで遺構が確認され、小集落が僅かに遺存していることが判明した。この地域を第1次調査として本調査を実施したが、本調査予定地南側は以前の建物基礎によって遺構面が残っていなかった。中世後半の集落が微高地上に営まれたものと思われ、地形的にも西側福崎駅方面に広がっている可能性が予想された。

第２次調査では遺跡がさらに西側に広がっていることを確認し、中世を大きく遡った遺構・遺物が確認された。第3次調査で観光交流センター部分の本調査を行い、弥生時代中期まで集落は遡ることが明らかとなった。遺物の中には前期末を志向する壺破片も混ざっており、さらに古くなるかもしれない。溝は緩やかに弧を描くが直線的に南北に延び、環濠集落の可能性も考えられた。時期はやや下るSD03もわずかに弧状を呈するが概ね平行している。直交するSD04を含めた3条の溝は計画性を持っていたかもしれない。

第４次調査でも遺構面が確認されたので第5次調査として本調査を実施した。予想通り福崎駅に向かって微高地は高くなり、遺跡が広がっていることが明らかとなった。さらに駅を越え微高地が西側に延びている可能性が高まった。遺構面は開発予定建物南半に広がっていたが、以前の建物基礎などで大きく損壊を受けていた。弥生時代中期から近世にわたる広い時期の遺構が確認され、中溝遺跡は弥生時代中期（前期に遡る可能性もある）以降の複合遺跡であることが明らかとなった。今回の調査結果では古墳時代前期後半から後期は断絶していたようである。奈良時代から平安時代前半の明確な遺構は検出されていないが、遺物は確認されている。

確実に時期が押さえられる古い遺構は３次調査のSD02と5次調査のSX02で、時期は弥生時代中期後半である。SD02は埋没時期で開削時期はそれより遡る。畿内及び畿内周辺部通有の土器で装飾的な播磨の壺は出土していない。ただ加飾気味の蓋19は注目される。3次調査のSD03・SD04は同時期か１時期遅れた時期である。主軸方向を合わせており、計画的な溝ではないかと思われる。

弥生時代後期前半は断絶するが、弥生時代後期末期から古墳時代初頭（庄内併行期）に竪穴住居・掘立柱建物・溝・落ち込みなどが構築される。現時点で確認した遺構が最も多い時期となる。SH01は方形住居で播磨に多い１０（イチマル）土坑を有する住居で新例を加えたことになる。北壁中央に炉を築いており、別に中央付近にも火床が存在する。高床部を持ち、１０土坑を有する住居の中で新しい時期特有の焼土面が多く炭層が広がり、工作台と思われる平石を伴っているタイプである。北壁沿いの炉跡から直線状に火床が延び、低床部の壁溝もこの延長部の南北辺だけ設けているのは特徴的である。通常住居よりも工房的な性格が強いと思われる。掘立柱建物SB02はSH01の西側に位置している。柱穴から弥生末の土器片が出土しているが、この時期以降の建物と思われる。福崎町でも検出された当該時期の建物柱穴は深いことからも、竪穴住居よりは新しい古墳時代の建物であろう。落ち込みは少量の土器

しか出土しておらず、性格は不明である。溝の時期は竪穴住居と同じで、竪穴住居北側に主軸をほぼ同じくして西から東に直線的に流れている。有機的な関係があるものと思われる。

SD06から比較的まとまって土器が出土している。他地域の影響を受けている土器が多いのが特徴である。数点の古相を示すものが入っているが、庄内新段階併行の一括土器群である。山陰系や北近畿系の土器が存在する。Ⅴ様式系のくの字口縁の甕は認められるが、庄内甕は確認されない。今までは庄内甕が搬入されない地域と考えられていたが、昨年度の試掘調査で山崎から庄内甕が出土したことから、考え方が変化してくる。庄内甕を持っていないのが中溝遺跡の特徴の１つかもしれない。逆に山陰の土器が多いのも特徴と言える。器種では高杯・器台が目に付く。

古墳時代初頭以降も遺構は、断続的に確認されている。大規模に集中する時期はなく、小規模な集落が断続したと思われる。掘立柱建物・柵の主軸方向はSB04とSA03～05のグループとSB03とSA01・02のグループの2種あることから、2時期あるものと思われる。確実な時期は不明だが中世前半かと思われる。井戸が最も新しい遺構である。石組の井戸で、井筒部は残存していなかった。第3次調査区本体工事でも北西側で石組井戸を確認しており、中近世の遺構が広がっていたものと思われる。

当初予測した鉄道関連遺構や近世以降は確認されなかった。屋敷地の遺構は全て現代のものであった。

SD06　出土土器

写 真 図 版

1G 機械掘削

1G 全景

1G 断ち割り

1G 断ち割り

2G 機械掘削

2G 全景

3G 全景

3G 埋め戻し終了

図版 2

11G 調査風景

11G 溝検出状況

11G 北壁

11G 埋め戻し終了後

13G 西壁

13G 調査風景

13G ピット検出状況（南から）

13G ピット全掘（南から）

5G 機械掘削

5G 南壁

6G 機械掘削

6G 南壁

6G 埋め戻し終了（南から）

9G 調査前

9G 南壁

9G 埋め戻し

図版４

駅前南半（北から）

駅前東側（工事立会）

17G 調査前（西から）

17G コンクリート基礎

17-1G 機械掘削

17- 1G 南壁

17- 1G 埋め戻し

福崎駅

13G 埋め戻し終了（北から）

14G 全景（南から）

15G アスファルト断裁

15G 機械掘削

15G 北壁

15G 埋め戻し

16G 北壁

16G 北壁断ち割り

18G 調査前（北西から）

18G 調査前（北から）

18G 機械掘削

18G コンクリート基礎検出状況

18G 東壁

18G 調査風景

18G 埋め戻し

18G 埋め戻し終了（北から）

19G 調査前（北西から）

19G 機械掘削

19G 東壁

19G 埋め戻し

19G 埋め戻し終了（南東から）

19G 調査地全景（北西から）

調査前（北から）

調査風景

機械掘削

全景（北から）

全景（南から）

SD01（東から）

SD01アゼ（東から）

第１次調査

SB01（西から）

SB01（東から）

SB01（北から）

P2 断ち割り

P3 断ち割り

P4 断ち割り

東壁

西壁

調査風景

埋め戻し終了後（南から）

埋め戻し終了後（北から）

第３次調査

調査前（東から）

調査前（南西から）

重機掘削状況

SK01 断面（南から）

SK02 断面（南から）

作業のようす

SD02 断面（南から）

SK03 断面（東から）

SK04 断面（東から）

調査区東側埋め戻し状況

P2 断面（東から）

P3 断面（東から）

SD03 東断面（西から）

SD03 断面（東から）

SK06 断面（東から）

西壁礎石検出状況

第３次調査

SD04 土器検出状況

SD04 土器出土状況

SD04 断面（西から）

SK05 断面（東から）

SD03、04 完掘状況（東から）

SD05 断面（西から）

調査区西側埋め戻し状況

調査区西側埋め戻し状況

調査区東側完掘状況（南西から）

調査区西側完掘状況（北東から）

第５次調査

調査前（北東から）

調査前（南西から）

調査前（改良土除去後・南から）

調査前（改良土除去後・南西から）

機械掘削

調査風景

調査風景

調査風景

SD06 検出状況（南から）

SD06 調査状況

SD06 土器出土状態

SD06 北アゼ（北から）

SD06 南アゼ（北から）

SD06 全景（南から）

SD06 調査風景

SX02（南から）

SX02 断面（南から）

SX03 アゼ（北から）

SX03（北から）

全景（南東から）

全景（北東から）

全景（南西から）

SH01 検出状況（南東から）

北西壁

SH01 調査風景

SH01 アゼ（西から）

SH01 炭・焼土検出状況（西から）

SH01 炭・焼土検出状況（南から）

SH01 床面炭化材検出状況

SH01 壁溝検出状況

SH01（西から）

SH01 低床部（東から）

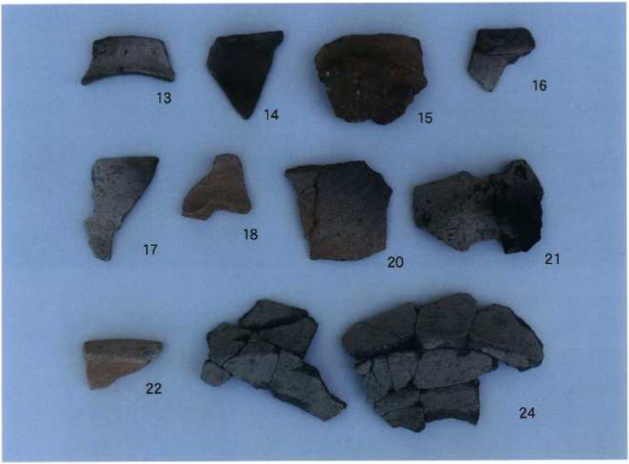
SH01 低床部（北から）

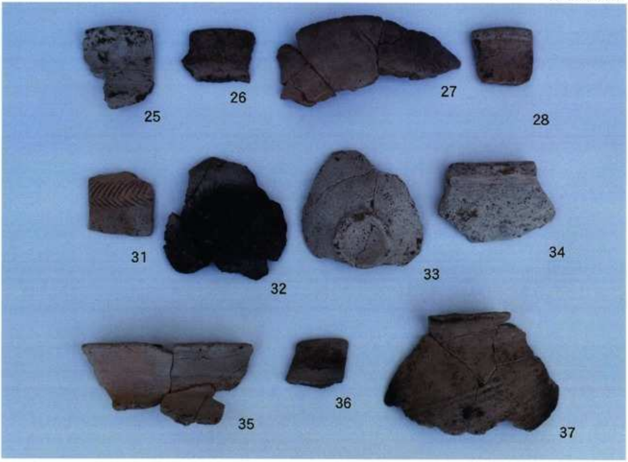
SH01 低床部（東から）

SH01 床面台石出土状態

SH01 調査風景

第５次調査




25
26
27
28
31
32
33
34
35
36
37

19

23

31

第５次調査

28

30

45

50

46

48

51

52

54

53

S1

S2

報告書抄録

ふりがな	なかみぞいせき
書名	中溝遺跡
副書名	福崎駅前整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	福崎町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	22
編著者名	樋口　碧・渡辺　昇
編集機関	福崎町教育委員会
所在地	〒679-2280　兵庫県神崎郡福崎町南田原3116-1　TEL：0790-22-0560
発行年月日	2021年11月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	要因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
なかみぞいせき 中溝遺跡 試掘 1次 2次 3次 4次 5次	ひょうごけんかんざきぐん 兵庫県神崎郡 ふくさきちょうふくだ 福崎町福田 あざなかみぞ 字中溝	28443	410071	34度 57分 37秒	134度 45分 2秒	2016.6.15～2018.2.5 2016.12.19・20 2018.6.13 2018.8.2～17 2019.12.18 2020.2.3～26	83㎡ 34㎡ 2.3㎡ 250㎡ 8㎡ 560㎡ 計937.3㎡	福崎駅前整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
なかみぞいせき 中溝遺跡	集落跡	弥生 古墳 中世	竪穴住居 溝 掘立柱建物 井戸	弥生土器、須恵器 土師器 陶器	

2021年11月15日印刷
2021年11月15日発行

福崎町埋蔵文化調査報告22

中溝遺跡
―福崎駅前整備事業に伴う発掘調査報告―

編集　福崎町教育委員会

発行　〒679-2280　兵庫県神崎郡福崎町南田原3116-1

印刷　クリヤ印刷所